わたしもおにいちゃん！と呼びたいな～

yuiyui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わたしもおにいちゃん！と呼びたいな～

【Ｎコード】
Ｎ８２６１Ｋ

【作者名】
ｙｕｉｙｕｉ

【あらすじ】
おにいちゃん！　と呼びたいフェイト・・・
なのはに相談していたら、そこへエイミィが帰ってきた。
そのエイミィが　ある魔法の提案をしてやってみたら・・・

第1話　フェイトとなのはとおにいちゃん

わたしは、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン　小学三年生９歳です。
名前のとおり、ハラオウン家に養子に入り、クロノの妹として家族の仲間入りをしました。
リンディ提督　いまは「母さん」と呼ばないといけないんだけど、まだ恥ずかしくてなかなか言えません。
リンディ提督の長男クロノ　いままでずっとクロノと呼んでいたので、同じくなかなか「おにいちゃん」とは言えません。
わたしの親友である高町なのは　いまは「なのは」と呼んでいます。あの事件後、わたしが本局へ護送される前に会うことができ、そのときに友達になれた。
なのはの家族は、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんを入れて5人家族。
生れながらの妹で、兄妹のいる中で、わたしは新人、なのははベテランです。
そこで学校が冬休みに入って2日目、なのはに「クロノに、おにいちゃん」と呼んでみたいと相談したところ、うちに来てくれた。

「う～ん　やっぱり　練習しかないんじゃないかな～」
「で　でも　なのは、いままで　クロノって呼んでいたから難しいよ」
「なんかいい方法がないかな」
コタツの中で、ミカンを食べながら考えていた。
すると、買物に出掛けていた　エイミィが帰ってきた。
「たっだいま～　っと…」
「あ　エイミィ　おかえり～」
「エイミィさん　おかえりなさい」

「あ　なのはちゃん、いらっしゃい」
う～　さむさむ～　っと言いながら、エイミィはコタツの中に入った。
「な～んか、二人して悩んでいるみたいだね～」
「「えっ！」」
（フェイトちゃん　エイミィさんにも、相談にのってもらおうよ）
（エイミィに？）
（うん　一応年上だし、いいほうがあるかもしれないよ）
（そうだね　なのは）
「あ　あの　エイミィ　じ　実はね、クロノのことなんだけど」
「うん　クロノくんがどうかしたの？」
「あのね、わたし　なのはのように、クロノのこと　おにいちゃんって呼んでみたいんだ、でもなかなか言えなくて」
「ふふ～ん　あのクロノくんを、おにいちゃんね…」
「エイミィさん　なんとかならないかな～」
「あるよ　一つだけ、なのはちゃんとエレベーターで話してた時から、少し考えていたんだ」
「さっすが　エイミィさん」
「でもね～　いろいろと条件もあるし、なにしろ禁術だからあんまり勧めることができないんだよね」
「なんですか　その条件って？」
「一つはね、なのはちゃんの協力、二つ目は他の人にばれないこと、三つ目は一週間以内に戻ること、四つ目は…」
いくつか条件がでてきたけど、一週間なら問題ないかな？ってことで、やってみることにしました。
「で、その方法は何ですか？　三つ目に関係があると思うんですけど？」
「うん　フェイトちゃんと、なのはちゃんが入れ替わる魔法なの」
「えっ！　い　入れ替わるんですか？」
「そう」

わ　わたしが　なのはに…　なのはになるんだ…
「そして、フェイトちゃんが、なのはちゃんの身体で、なのはちゃんのお兄さんを呼ぶことで慣れてもらうの」
なのはに…　なのはに…　なのはに…
「うん　なんか面白そうですね」
「んとね　面白そうなのは確かなんだけど、一回きりの魔法だし、いくつかの条件を破るともう元に戻れないんだよ」
「いいです　エイミィさん、わたし、フェイトちゃんのためならやります」
「そっか…」
「ねえ　フェイトちゃん、やってみようよ」
「なのは…、お願いできるかな？　一週間で克服してみせるから」
「うん！」
「じゃあ　エイミィさん、その魔法教えてください」
「ほんとに　いいのね？」
「「はいっ！！」」
「その魔法の　使い方はね……」

つづきます～

わたしは　なのは、なのはは　わたしに

「う　ううん…」

わたし　気を失っていた…？
うまくいっていれば、わたしは　なのはになっているはず。
わたしは　ゆっくりと目をあけてみた。
目の前に　私が寝ていた。
もう入れ替わっているんだね。
なのはから見た　私ってこんな感じなんだ…
鏡をみてわかる私の姿は、私が動かすと同時に動く。
でもいまは、私が動かしても元の私は動かない。
不思議だ…
なのはになっている私も不思議な体験だ。
しばらくの間は、なのはの身体で　おにいちゃん修行する。
うまくできるのかな…
そう考えていたら、私になった　なのはが起きた。

「にゃ　にゃにゃにゃ！…」

なのは…　わたしの身体で、なのなの語を話すって何か違和感があるよ？
「なのは　大丈夫？」

「うっ　うん　大丈夫だよ　フェイトちゃん」
うん　やっぱり自分の姿を実際に見ると　びっくりするよね。
「やっぱり　びっくりするよね　自分が目の前にあると」

「そうだね　でも、フェイトちゃんの目から見た私って、こんなふうに見られているんだな～って…」

「私もだよ　なのは、しばらくの間だけど　克服してみせるからお願いね？」

「うん　がんばって　おにいちゃんって呼べるようになってきてね」

エイミィが、リビングから私の部屋に戻ってきた。

「あ～　やっと起きたみたいだね」

「うん　起きたよ　エイミィ」

「はい　エイミィさん」

「う～ん　やっぱり普段の会話をしているせいか、台詞が逆だと違和感を感じちゃうな～」

「エイミィ　しょうがないよ入れ替わったばかりは」

「ううん　駄目駄目　普段の生活に支障がない範囲で記憶を共有しあっているんだから、ちゃんと言葉も直さないと」

「だいじょうぶだよ　フェイ…ううん　なのは」

「な　なのは　まで、そ　そんなに急に直せっていわれても困るよ…」

「でもね　フェイトちゃん　なのはちゃんの姿で、フェイトちゃんの話し方をされると、すぐばれることにもなるし、元に戻ったあと

も困るよ？」

「で　でも…　やっぱり　その…」

「だいじょうぶ　だいじょうぶ　普段できないことを　やってみるって面白そうだよ　なのは」

「なのは…　何かもうすっかり私になりきっているみたいだね？」

「うん　クロノくんのことを　フェイトちゃんの姿なら　クロノって呼び捨てもできるし…」

なのはは　クロノのことを、呼び捨てしたかったのかな…？

「ふふ～ん　フェイトちゃん、エイミィの話の中で記憶は共有するってことで思いついたんだけど～」

な　なにを思いついたんだろう…

あっ　何かエイミィがニヤニヤしているよ…

「元に戻るまでに　しっかりと　「おっ　にっ　いっ　ちゃ　んっ！」って、身体に覚えさせておいたほうがいい？」

えっ　ええ！　な　なのはがクロノのことを、おっ　おにいちゃんって　先に呼んじゃうの？

「いっ　いいよ　なのは、ちゃんとわたしが言えるようになって見せるから」

「う～ん　ちょっと残念…」

そうして、しばらくたった夕方　私は　なのはの家に行く時間…
ううん　帰る時間になった。
「じゃあ　なのは　行ってきます…」

「うん　がんばってきてね、レイジングハートもちゃんとフォローしてね」

「ｙｅｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！」

「行ってきます　エイミィ」

「うん　いってらっしゃい　がんばるんだよ～、できなかったらリンディ茶が待っているからね~」

エイミィ…　その罰は酷いよ　あの有名な謎ジャ○　に、勝るとも劣らないっていうほどなのに…
こうして　なのはの家で、修行することになった。

つづきます～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8261k/

わたしもおにいちゃん！と呼びたいな～

2010年10月11日16時03分発行